

福祉社会学会第6回大会プログラム

日時	2008年6月7日（土）・8日（日）
会場	上智大学 四ッ谷キャンパス 3号館
参加費	当日 一般 4000 円・学生 3000 円
	事前振込 一般 3000 円・学生 2000 円
懇親会費	一般 3000 円・学生 2000 円（当日のみ）

第1日目 6月7日（土）

10:30～12:30	理事会	【9号館 356 教室】
13:00	受付開始	【3号館 3階】
13:30～15:30	パネル・ディスカッション〔脱福祉国家施策における身体政治を考える〕	【3号館 325 教室】
13:30～17:00	自由報告 第1部会〔福祉社会と労働〕	【3号館 371 教室】
	13:30～14:05：第1報告 14:40～15:15：第3報告 15:50～16:25：第5報告 14:05～14:40：第2報告 15:15～15:50：第4報告 16:25～17:00：第6報告	
17:30～19:30	懇親会	【11号館会議室1（7階）】

第2日目 6月8日（日）

9:00	受付開始	【3号館 3階】
9:30～12:25	自由報告 第2部会〔地域における福祉〕 第3部会〔高齢者と介護〕	【3号館 325 教室】 【3号館 371 教室】
	9:30～10:05：第1報告 10:40～11:15：第3報告 11:50～12:25：第5報告 10:05～10:40：第2報告 11:15～11:50：第4報告	
12:25～13:15	昼休み 編集委員会【9号館 358 教室】 研究委員会【9号館 356 教室】 シンポジウム打合せ【9号館 359 教室】	
13:15～14:10	総会	【3号館 321 教室】
14:15～17:30	シンポジウム〔介護労働のグローバル化と介護の社会化〕 （日本学術会議社会学委員会 少子高齢社会分科会共催）	【3号館 321 教室】

第 1 日目 6 月 7 日 (土)

13:00 受付開始

13:30~15:30 パネル・ディスカッション

【3号館 325 教室】

脱福祉国家施策における身体政治を考える

ー介護予防施策、健康政策における身体フィールドワークからー

司会： 二宮雅也（上智大学）

報告者：

1. 「行政施策から生まれる健康づくりセルフヘルプグループの意味」

二宮雅也（上智大学）

2. 「介護予防施策の功罪」

新雅史（学習院大学非常勤講師）

3. 「高齢者健康増進施策の展開にみる身体政治性」

高尾将幸（筑波大学大学院）

討論者：

「管理型権力と身体をめぐる新しい政治の視点から」

山本敦久（上智大学）

13:30~17:00 自由報告

<第 1 部会> 福祉社会と労働

【3号館 371 教室】

司会：寺田貴美代（新潟医療福祉大学）

1. 若年非正規労働者を中心とした労働組合運動の活動と位置づけ

橋口昌治（立命館大学先端総合学術研究科）

2. 施設における介護労働の「脱アサイラム化」阻害要因

片桐資津子（鹿児島大学）

3. 共生社会への道のりーカンボジア国軍除隊兵士の自立支援政策からの考察ー

牧田満知子（兵庫大学）

4. 現代における貧困の構造連関の一考察

右京信治（法政大学大学院）

5. 韓国の高齢女性問題と高齢者福祉政策ージェンダーの視点からー

金香男（フェリス学院大学）

6. 〈異なりの身体〉をめぐる倫理／政治経済について

野崎泰伸（立命館大学生存学創成拠点）

17:30~19:30 懇親会

【11号館会議室 1（7階）】

第2日目 6月8日(日)

9:00 受付開始

9:30~12:25 自由報告

<第2部会> 地域における福祉

【3号館 325 教室】

司会：山井理恵（明星大学）

1. 肢体不自由障害者の快適な地域生活に対するインフォーマルなサポートの役割
丸岡稔典(国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所)
2. 地域自立支援協議会における Street level leadership
ー障害福祉政策におけるソーシャルアクションの可能性ー 竹端寛(山梨学院大学法学部)
3. 同和対策終焉以降の地区在住高齢者の生活変化とその困難
ー大阪市内住吉地区を事例にー 矢野 亮(立命館大学大学院先端総合学術研究科)
4. イタリア・トリエステ地域精神保健活動とアソシエーション
ー「主人公になること (protagonismo)」の取り組みを中心にー
鈴木鉄忠(東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻)
5. コミュニティソーシャルワークの評価方法をめぐって
ー変化の理論と参加型評価を取り入れながらー
室田信一(日本学術振興会・同志社大学大学院)

<第3部会> 高齢者と介護

【3号館 371 教室】

司会：松村直道（茨城大学）

1. 1980 年代のリハビリテーション雑誌のなかの「寝たきり老人」言説
○田島明子(立命館大学大学院)
坂下正幸(立命館大学大学院)
伊藤実知子(立命館大学大学院)
野崎泰伸(立命館大学衣笠総合研究機構 GCOE 生存学研究拠点)
2. 1990 年代～2000 年代における「寝たきり老人」言説と制度
ー死ぬことをめぐる問題ー
○仲口路子(立命館大学先端総合学術研究科)
北村健太郎(立命館大学大学院先端総合学術研究科)
堀田義太郎(立命館大学衣笠総合研究機構)
3. 1990 年代～2000 年代における「寝たきり老人」言説と医療費抑制政策の接合
○有吉玲子(立命館大学大学院先端総合学術研究科)
北村健太郎(立命館大学大学院先端総合学術研究科)
堀田義太郎(立命館大学衣笠総合研究機構)
4. 在日コリアン高齢者介護における相互扶助機能
ーNPO 法人コリアンネット愛知を事例としてー
伊藤尚子(名古屋大学医学部保健学科)
5. 介護というコミュニケーション ー関係の非対称性をめぐってー
深田耕一郎(日本学術振興会・立教大学社会学研究科)

13:15～14:10 総 会

【3号館 321 教室】

14:15～17:30 シンポジウム（日本学術会議社会学委員会少子高齢社会分科会共催）

【3号館 321 教室】

開会の辞：山田昌弘（中央大学）

「介護労働のグローバル化と介護の社会化」

司会：秋元美世（東洋大学）
後藤澄江（日本福祉大学）

報告者：

1. 「高齢者介護における外国人労働者の位置づけーアジア諸国の事例からー」

安里和晃（（財）世界人権問題研究センター
嘱託研究員、笹川平和財団主任研究員）

2. 「介護現場が抱える課題の現状ー介護福祉士法の改正と介護労働の方向性ー」

森山千賀子（白梅学園短期大学）

3. 「介護保険制度と介護の『社会化』『再家族化』」

藤崎宏子（お茶の水女子大学）

討論者：牧里每治（関西学院大学）

白波瀬佐和子（東京大学）

報告要旨

パネル・ディスカッション：

脱福祉国家施策における身体政治を考える

ー介護予防施策、健康政策における身体フィールドワークからー

【3号館 325 教室】

司会：二宮雅也（上智大学）

「介護予防」「特定健診・特定保健指導」といった政策を抛り所としながら、国家は新たな形で私たちの身体に介入しようとしている。過去に日本が近代化を押し進めるにふさわしい身体形成のために「体育」という領域を通じて身体管理を行っていたように、現在は「健康」や「介護予防」という名のもとにさまざまな機関が身体管理を行うようになった。しかしながら、介護予防や健康の領域においても資本主義経済の範疇で身体が管理される限り、全ての身体管理を可能にすることは不可能である。つまり、経済格差の問題や制度上の隙間から管理されない（こぼれ落ちる）身体がある。こうしたこぼれ落ちる身体は、結果的に「健康格差」や「福祉格差」といった新たな格差を生み出す要因となるのである。ここでは、シンポジストの報告から運動指導をはじめとする身体管理が一体どのような問題を孕んでいるのかを整理するとともに、新たな監視による身体政治化を議論していきたい。

報告者：

1. 「行政施策から生まれる健康づくりセルフヘルプグループの意味」

二宮雅也（上智大学）

2. 「介護予防施策の功罪」

新雅史（学習院大学非常勤講師）

3. 「高齢者健康増進施策の展開にみる身体政治性」

高尾将幸（筑波大学大学院）

討論者：

「管理型権力と身体をめぐる新しい政治の視点から」

山本敦久（上智大学）

シンポジウム：

介護労働のグローバル化と介護の社会化

【3号館 321 教室】

司会：秋元美世（東洋大学）
後藤澄江（日本福祉大学）

日本社会では少子高齢化の進行とともに、介護の現場でさまざまな問題が顕在化しつつある。家族の小規模化の中で、家族介護は構造的な変化にさらされている。増大する高齢者の介護を誰が担うのか、費用負担はどうあるべきかといった介護労働問題をめぐって、外国人介護労働者の導入、介護保険制度にみられるサービス供給体制の変化など、グローバル化、市場化の影響が浮上しつつある。

本シンポジウムでは、施設（施設福祉サービス）や地域社会（在宅福祉サービス）での介護労働の現場で市場化やグローバル化などがどのような影響を与えているのか、まずその現状と課題を確認した上で、現実的な介護の方向性を検討することにした。

（本シンポジウムは日本学術会議社会学委員会少子高齢社会分科会との共催で行われます。）

開会の辞：山田昌弘（中央大学）

報告者：

1. 「高齢者介護における外国人労働者の位置づけーアジア諸国の事例からー」

安里和晃（(財)世界人権問題研究センター

嘱託研究員、笹川平和財団主任研究員）

2. 「介護現場が抱える課題の現状ー介護福祉士法の改正と介護労働の方向性ー」

森山千賀子（白梅学園短期大学）

3. 「介護保険制度と介護の『社会化』『再家族化』」

藤崎宏子（お茶の水女子大学）

討論者：牧里每治（関西学院大学）・白波瀬佐和子（東京大学）

自由報告

＜第1部会＞ 福祉社会と労働 【3号館 371 教室】

司会：寺田貴美代（新潟医療福祉大学）

1. 若年非正規労働者を中心とした労働組合運動の活動と位置づけ

橋口昌治（立命館大学先端総合学術研究科）

1990年代に進行した「学校から職場への移行」システムの機能不全と非正規雇用の急増は、若年層の雇用条件を急激に悪化させた。また、労組が正社員あるいは公務員を中心に構成されてきたこともあり、急増する未組織の若者が働く環境は無法地帯と化している。それに対して首都圏青年ユニオンなど非正規労働者を中心としたユニオンの結成が相次いでいる。本報告ではそうした若者のユニオンの活動を整理し、その位置づけを試みる。

2. 施設における介護労働の「脱アサイラム化」阻害要因

片桐資津子（鹿児島大学）

公的介護保険制度の施行により、施設介護は、「措置から契約へ」と変化した。だが、じっさいには「介護労働の疎外化」が特養ホームの介護労働過程において観察される。本報告では、E. ゴッフマンのアサイラム研究を援用して、アサイラムとしての特養ホームで働く介護職員の介護労働に焦点を当てる。具体的には、①専門家としての介護技術、②良き相談相手、③ユニットケアの葛藤を検討し、脱アサイラム阻害要因を明らかにする。

3. 共生社会への道のり—カンボジア国軍除隊兵士の自立支援政策からの考察—

牧田満知子（兵庫大学）

カンボジア国軍除隊兵士自立支援プログラムは、除隊希望兵士に経済的な自立を与え地域社会へ軟着陸させる事を目的に、2001年から公募を開始し、現在施行されている政策である。除隊時に一時金や現物を与えるだけでなく、技能訓練を受講させ、持続的な自立生活を可能にさせるよう設計されている。しかし予想されたことではあるが問題点が多い。本発表ではシェムリアップ州ヴァリン郡、アンコールトム郡での受講既卒兵士に対する聞き取りを通して、自立支援政策の是非を問い直す試みである。

4. 現代における貧困の構造連関の一考察

右京信治（法政大学大学院）

先行研究では、現代日本の貧困は、特定年齢や世代だけでなく、状況を複合的に抱えた人々のなかに広く見いだされる。本報告では、この状況を関係性の問題としてとらえ、貧困の意識の背後に意識の貧困の問題を明らかにすることを目的としている。インタビューとエスノグラフィーの結果から、ライフコースとその日常的・個別的な事態、およびそこに介在する媒介要因の布置連関を総体として解明することを試みる。

5. 韓国の高齢女性問題と高齢者福祉政策—ジェンダーの視点から—

金香男（フェリス女学院大学）

本稿では、韓国における高齢者問題をジェンダーの視点から分析する。主に高齢人口の構造と高齢者の生活およびそれをめぐる諸問題を検討することで、韓国の高齢女性の生活実態を明らかにする。そして、韓国の高齢者福祉政策が、これらの問題にどのように対応しているのか、その現状と課題について考察する。

6. 〈異なりの身体〉をめぐる倫理／政治経済について

野崎泰伸(立命館大学生存学創成拠点)

障害や老いの身体という〈異なりの身体〉が惹起する問いの一つに、彼らの生を支援する倫理問題がある。だが、いくら倫理を説こうが、現場の人材不足・経済的困窮はなくなるわけではない。その中でとらざるをえない決定——妥協や調停の産物——にたいして、私たちはどのような態度を取るべきなのか、いわば「現場の調停主義」という政治経済に対して何が言えるのか、についての考察を行なう。

＜第2部会＞ 地域における福祉 【3号館 325 教室】

司会：山井理恵（明星大学）

1. 肢体不自由障害者の快適な地域生活に対するインフォーマルなサポートの役割

丸岡稔典(国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所)

現在の障害者に対する市場原理に基づくサービス提供の課題として、個々のニーズに即応した柔軟な手段的サポートや心理的充足をもたらす情緒的サポートの不足が指摘されている。本報告では、東京都世田谷区在住の肢体不自由障害者へのインタビュー調査に基づき、公的サービスと非専門的かつ友人や地域住民、家族等により制度や契約の枠組みにとらわれずなされるインフォーマルなサポートの利用状況とその生活への影響を分析する。

2. 地域自立支援協議会における Street level leadership

ー障害福祉政策におけるソーシャルアクションの可能性ー 竹端寛(山梨学院大学法学部)

本発表では、障害福祉政策分野でのソーシャルアクションの可能性について考察する。障害者自立支援法では、個別ケア会議で解決困難な事例について、市町村レベルで関係者のネットワークを組織し、方策を協議する場として地域自立支援協議会を設置することを義務づけた。同協議会を J.C. Vinzant and L.Crothers(1998)による Street level leadership 理論に基づいて検討し、同協議会が果たし得るソーシャルアクション機能について分析する。

3. 同和対策終焉以降の地区在住高齢者の生活変化とその困難

ー大阪市内住吉地区を事例にー 矢野 亮(立命館大学大学院先端総合学術研究科)

2001 年をもって、約 40 年間続いてきた、同和対策特別措置法及び地対財特法に基づく「同和対策諸事業」が終焉した。しかし現在、内田雄造氏が指摘してきたとおり、公営住宅の家賃体系の変化に伴い「被差別部落」と呼ばれるエリアから若年層と中高年層の流出が加速しており、エリアには「高齢者と障害者、低所得者等の社会的困難を有する住民のみが取り残される」という事態が生じている。また、解放運動を通じて高齢住民自らが築いてきた「高齢者」の「語り合いの場」の剥奪が急激に生じている。結果、当該エリア在住高齢者は様々な困難を余儀なくされる。その現状を「当事者」の語りから明らかにする。

4. イタリア・トリエステ地域精神保健活動とアソシエーション

ー「主人公になること (protagonismo)」の取り組みを中心にー

鈴木鉄忠(東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻)

本報告では、1970 年代以降主導的に精神病院の脱施設化運動を進めてきたイタリア・トリエステの地域精神保健活動を事例として取り上げる。とりわけ、諸制度機関を媒介し、社会的協同組合の基盤ともなりうるアソシエーションの活動に焦点を当て、現在アソシエーションが直面している焦眉の課題と、それに対する実践を現地調査に基づいて明らかにした上で、それが現代社会の文脈でいかなる意味をもつのかについての考察を試みる。

5. コミュニティソーシャルワークの評価方法をめぐって

ー変化の理論と参加型評価を取り入れながらー

室田信一（日本学術振興会・同志社大学大学院）

社会サービスの評価は主として個人を評価単位とするのに対して、コミュニティソーシャルワーク（CSW）など、プログラムの対象がコミュニティにおける利害関係者を含む場合、利害関係者による因果関係を考慮した評価方法が必要であると思われる。本報告は、大阪府における CSW 実践を参考事例に、コミュニティを対象としたプログラム評価の在り方を考察し、評価のための枠組みを提示するものである。

＜第3部会＞ 高齢者と介護 【3号館 371 教室】

司会：松村直道（茨城大学）

1. 1980 年代のリハビリテーション雑誌のなかの「寝たきり老人」言説

○田島明子（立命館大学大学院）

坂下正幸（立命館大学大学院）

伊藤実知子（立命館大学大学院）

野崎泰伸（立命館大学衣笠総合研究機構 GCOE 生存学研究拠点）

「寝たきり老人」はよく知る言葉だが、その言葉の発生にリハビリテーションは大きく関与する。また 1990 年代以降の「寝たきり老人」をめぐる言説と高齢者医療・福祉諸制度の連関を見ると「寝たきり老人」は高齢者医療・福祉諸制度の方向性を占う重要なキーワードだった。私たちはこれまで 1970 年代のリハビリテーション雑誌のなかの「寝たきり老人」言説について調査し 2007 年障害学会で報告した。本報告では 1980 年代のリハビリテーション雑誌のなかの「寝たきり老人」言説の分析を行い、1970 年代、1990 年代以降の言説との（非）接合を考察する。

2. 1990 年代～2000 年代における「寝たきり老人」言説と制度 ―死ぬことをめぐる問題―

○仲口路子（立命館大学先端総合学術研究科）

北村健太郎（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

堀田義太郎（立命館大学衣笠総合研究機構）

1990 年代から 2000 年代は、日本の福祉施策が大きく転換した時期であるといえる。われわれは 1990 年代の「寝たきり老人」言説と制度について 2007 年度障害学会で報告した。本報告ではそれをさらに拡大し、さまざまな言説の中に示される「寝たきり老人」の社会的・福祉的・医療的位置を確認する。それらの言説には「寝たきり否定」の文脈が散見され、これを詳細に考察し提示するものである。

3. 1990 年代～2000 年代における「寝たきり老人」言説と医療費抑制政策の接合

○有吉玲子（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

北村健太郎（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

堀田義太郎（立命館大学衣笠総合研究機構）

本報告は、田島報告・仲口報告を受けて位置する。私たちは、第 4 回障害学会で 1990 年代の「寝たきり老人」言説と制度について報告した。高齢者の医療や福祉が語られるとき、同時に医療経済が議論される。医療経済の議論は何を論じ、論じていないのか。逆に、医療経済をめぐる議論は、高齢者の医療や福祉の諸制度に影響を及ぼし、さらに、高齢者の死生観にも影響を与えている。本報告では、これらの関係性について考察する。

4. 在日コリアン高齢者介護における相互扶助機能

―NPO 法人コリアンネット愛知を事例として―

伊藤尚子(名古屋大学医学部保健学科)

在日コリアン高齢者を支える NPO での、介護現場における高齢者、介護スタッフの相互関係は、在日コリアン高齢者の生活世界のなかでどのような機能をはたしているのかを明らかにすることを目的とした。施設内での在日コリアン高齢者と介護者は相互扶助機能があり、高齢者は安心していられる NPO を守るために介護者を助け、介護者は高齢者を扶助することで朝鮮人というアイデンティティを構築させることが明らかとなった。

5. 介護というコミュニケーション ―関係の非対称性をめぐって―

深田耕一郎(日本学術振興会・立教大学社会学研究科)

介護とはどのようなコミュニケーション過程であろうか。本報告では全身性障害者の自立生活を事例に障害者と介護者の相互行為をコミュニケーションとして把握することを試みる。社会学的なコミュニケーション概念の検討を行った後、介護がいかなる内実をもった行為であるのかを読み解く。介護には「援助」という意味が付与され、他者にむけた資源の提供行為となることが多いが、本報告はさらに踏み込んだ地点から介護を論じる。

大会参加者の方々へのご案内

1. 会場への交通案内

会場：上智大学 四ッ谷キャンパス（〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1）

JR 中央線、東京メトロ丸ノ内線・南北線/四ッ谷駅 麴町口・赤坂口から徒歩 5 分

（駐車スペースはありません。自家用車でのご来場はご遠慮ください。）

会場マップは 1 2 ページをご参照ください。

土・日曜日は、「上智大学」の文字の入った建物・7 号館の真下の北門は閉鎖されていますので、会場マップにあるイグナチオ教会横の土手沿いに進んで、正門からお入りください。

2. 受付について

受付は 2 日間とも、3 号館 3 階エレベータ前ロビーで行います。（会場は 3 号館 3 階です。）

大会期間中は、参加者名札を必ずお付けいただきますようお願いいたします。

会場には休憩室（9 号館 3 4 9 教室）、クローク（9 号館 3 5 7 教室）を用意しております。

3. 自由報告をされる方へ

- （1）大会の円滑な運営のために、発表時間（報告 2 5 分、討論 1 0 分）を守っていただきますようお願いします。
- （2）発表者の方は、当日、セッション開始 1 5 分前までに、会場に配置されている担当者にレジメ等の配付資料をお渡しください。パワーポイントを使用される方は、動作確認のため、セッション開始 3 0 分前に会場にお越しください。
- （3）パワーポイントを使用される方は、ファイルを USB メモリでご持参ください（準備できるパソコンの都合上、PowerPoint2003 形式をお願いします）。ご自身で使用するパソコンをご持参いただく場合は、ミニ D サブ 15 ピンで接続が可能であることをご確認の上お願いいたします。なお、万一の機器の不調に備え、パワーポイントなしでも報告可能なよう配付資料をご準備ください。

4. その他

- お弁当の準備はありません。受付でランチマップを配付いたします。会場の徒歩圏内には、昼食をとったり、購入可能な場所が多くあります（構内にもコンビニエンスストアがあります）。
- 飲み物などの自販機は構内にあります。休憩室にも若干の飲み物を用意します。

5. 大会に関するご連絡先等

大会への出席、参加費払い込みに関するお問い合わせは、件名に「第 6 回大会問い合わせ」と記入のうえ、下記（大会事務局担当：田渕）までメールにてお願いします。

r-tabuch@sophia.ac.jp